

私が考える「主体的・対話的で深い学び」

私が育成を目指す資質・能力

相手の立場や思いを想像し、自分の考えや気持ちを相手に的確に伝えられる思考力や表現力、対話力。それらを発揮しながら、多様な価値観を持つ他者と対話・協働することで、問題を解決したり、何かをつくり上げたりする力。

資質・能力を育む主体的な学び

生徒が学習の内容や目的を理解し、「今、あるいは今後の自分に必要な事柄だ」といった強い思いを持って実践する学び。主体的な学びは、対話的な学び、深い学びを行うための動機となると考える。

資質・能力を育む対話的な学び

学習のテーマに対して、どの生徒も高い関心を持ち、楽しさを感じ、話が尽きない状態で意見を述べ合うことで、考えを広げたり、深めたりする学び。状況に合わせて表現方法を工夫し合うことで、対話が円滑に行われ、話が尽きず、考えが広がる状態をつくる。

資質・能力を育む深い学び

抽象と具体を往還する過程で題材の本質を深く理解し、思考を深め、表現を磨いていく学び。生徒が自分の持つ情報や経験と題材とを結びつけ、自分事として捉え直すことで理解を深め、自分の言葉で説明できるようになる。



みうら・あきこ

教職歴 26 年。同校に赴任して 10 年目。指導教諭。探究科学科主任。国語科担当。アクティブ・ラーニングの実践は 7 年目。本誌 2017 年 10 月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

宮崎県立高鍋高校 秋月藩校「明倫堂」の精神を引き継いで開校。「身心學道」「師弟同行」「文武両道」「真善美」などを教育理念に掲げる。2019 年度、課題研究を通して学力向上を目指す探究科学科を設置。同年度から、文部科学省「学校 ICT 環境整備促進実証研究事業」の指定校。

設立 1923 (大正 12) 年 形態 全日制/普通科・探究科学科・生活文化科/共学 生徒数 1 学年約 260 人 2020 年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、筑波大、横浜国立大、九州大、熊本大、宮崎大、鹿児島大などに 47 人が合格。私立大は、法政大、立教大、関西大などに延べ 78 人が合格。

URL <http://takanabe-hs.ed.jp/>

「当事者意識」を高める協働学習で 抽象と具体を行き来し、深い学びに迫る

宮崎県立高鍋高校 三浦章子^{あきこ}

主体的・対話的で深い学び

実践事例

1

私が実践してきた「これまで」の授業

題材を自分に結びつけて、その本質を理解する

資質・能力を育成するために、私は「1人でできる学び」と「皆がいるからできる学び」を生徒に意識させる指導を大切にしています。例えば、漢字や語句の学習は1人で進められますが、題材について意見を交わし合ったり、伝え方を工夫して表現力を高めたりする国語の本質にかかわる学習は、他者の存在が欠かせません。

授業では、1人で考えるよりも思考が深まったり、新たな視点を獲得したりしやすいなど、「皆がいる」意義を繰り返し伝え、そういった体験ができるように、単元や題材の特性に合わせて、グループワークや群読、知識構成型ジグソー法(P.10*)など、「皆がいるからできる学び」を多く取り入れています。そうした学びに取り組み中で、資質・能力が育まれる実感を得ると、生徒は「この学びを通して、こんなスキルを獲得したい」といった目的意識を持つようになり、主体的に取り組みよう



写真1 1年次の現代文の授業では、「まちの豊かさ」をテーマにした評論を読んだ後、探究学習を行っている時のグループに分かれて、それぞれが考える「豊かさ」について話し合った。普段から協働学習を多く取り入れているため、積極的に意見を述べ合う姿が見られた。三浦先生は各グループを回り、興味深い視点を認めるなどして、話し合いが活性化するようにしていた。

にもなります。

そして、生徒が協働的な学びに主体的に取り組むことが、深い学びにつながると思っています。

国語における深い学びとは、抽象と具体の往還を通して題材の本質を理解し、思考を深め、表現を磨くことだと、私は考えます。例えば、1年次の現代文の授業では、評論「まちの

豊かさとは何か」を精読した後、筆者の考える「豊かさ」についてグループで話し合ってみていただきました。そして、探究学習で行った地域での活動を振り返り、そこで自分たちが感じた「豊かさ」と対比させることで、評論のテーマを自分事として捉え直させることを意図しました(写真1)。

ある生徒は、「私は、探究学習を

通じて人とのつながりを築くことができた。それこそが、筆者の述べる豊かさだと感じた」と発表しました。ほかの発表者も、筆者の主張をきちんと捉えた上で、それぞれが考える「豊かさ」を自分なりの言葉で具体的に説明できており、深い学びを実現できた手応えがありました。

抽象と具体の往還に欠かせないのが、シンキングツールです。3年間の指導を通して、「比較する」「分類する」「関係づける」「整理する」など、様々な思考過程を具体化する多様なシンキングツールを提示し、生徒自身が場面に合わせて適切なツールを選べるようにしています。先ほど例示した評論の授業では、筆者の主張を「ステップ・チャート」などでまとめたグループがありました(写真2)。

シンキングツールを使うと、問いを自分の体験などに結びつけて考えたり、複数の情報を自分の言葉で再構成して相手に分かりやすく説明したりしやすくなります。

そのように、複雑な情報をシンキングツールで図式化して要点を捉える練習は、生徒が今後の生活や仕事などの場面において、他者に説明するために欠かせない思考力の育成に

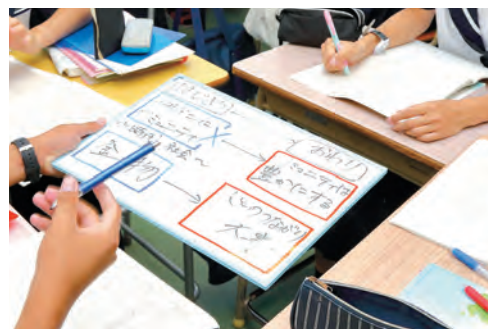


写真2 どのグループも、筆者の主張を考える上で適切だと思うシンキングツールを自分たちで判断して選び、多様な意見を図式化することによって収束させていった。

つながると考えています。

コロナ禍における気づき

対話のあり方に変化を感じ、状況に応じて表現する力を育成

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業中は、プリント学習が中心となり、「皆がいるからできる学び」が中断されました。私自身、オンラインで人と話す機会が増えたことから、その学びの大切さを改めて痛感し、対話のあり方を見つめ直ししました。そして、顔を合わせる対話以外にも様々なコミュニケーションの方法があることを、生徒に理解して

* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クレストーク活動」の3つの活動から成る。

ほしいと考えるようになりました。

そこで、学校再開後、教室内をホワイトボードで仕切り、数人の生徒がオンライン会議ツールで考えを伝え合い、ほかの生徒はプロジェクトに映し出された画面を見るといった形態の発表を授業に取り入れられた(写真3・4)。発表を聞いた生徒は、「資料ばかりを見ずに、前を向いて話した方がよい」「資料の提示方法を工夫した方がよい」などと、アドバイスをしていました。

オンライン会議ツールによる対話は、「状況に応じて適切な表現で対話する力」の育成がねらいです。ほかにも地域の人に電話をしたり、壇上でプレゼンテーションをしたり、様々な対話の状況があり、それぞれで適切な表現方法は異なります。授業では、普段と異なる対話を体験し、「対面で話す場合と何が違うか」と問いかけたことで、生徒の考える対話のあり方を描きだしたのではないかと感じています。

実は臨時休業中、実施まで2年を切った新学習指導要領を読み直し、これからの国語では、「実社会」「客観的視点」「情報収集・整理・分析」「他者性」といった観点がますます重

視されることを確認しました。そして、その中で資質・能力の3つの柱を育成する指導のあり方を考えようと、3年間を通して思考力・判断力・表現力等を効果的に育むために取り上げるべき題材とその順序などを組み立て、県内の若手の教師たちとオンライン会議ツールを用いて議論しました。そうした対話は、資質・能力を育成する指導が一層重視される中で不可欠なプロセスであり、今後の指導の方向性であると改めて認識できました。

私の「これから」の授業、越えるべき壁

学び合いを主体にした授業で創造的な学び手を育てたい

現在は、「皆がいるからできる学び」の充実に力を入れています。これまでの授業でも、教師が一方的に説明する時間をできるだけ減らしてきましたが、今後はさらに、「1人でできる学び」を効率的に行えるよう、家庭学習の取り組み方を工夫することで、授業での協働学習の比率を高めることを目指しています。

自分が関心を持つテーマについ

て、ほかの生徒と考えを深めていく活動が授業の中心になれば、生徒はますます意欲的に学ぶようになるでしょう。そして、「この題材についてもっと考えたい」「こんな学習活動をしてみたい」などと主体的に取り組んで活動が深まっていくと、まさに「話が尽きない」といった状態になり、考えが広がる好循環をもた

らす対話が生み出されるはずです。生徒がそうした創造的な学び手となった時、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の説明にある「思いや考えを基に創造したりすることに向かう」といった状態が実現するに違いありません。現在は取り組みの途上であり、より高い次元の深い学びを追究していきます。

写真3 発表者は、教室の後方のホワイトボードで仕切られた場所に入り、オンライン会議ツールで考えを発表した。



写真4 発表者の生徒がオンライン会議ツールでグループでまとめた考えを発表の様子を、ほかの生徒はプロジェクターで視聴。三浦先生が「気になったことはありませんか」と投げかけると、多くの生徒が、オンライン会議ツールでの対話と通常の対話との違いを意識したアドバイスをしていた。